

確かに習得し豊かに活用する児童の育成

～ 学びを充実させる指導過程の工夫 ～

1 本校の研究の概要

① 研究主題について

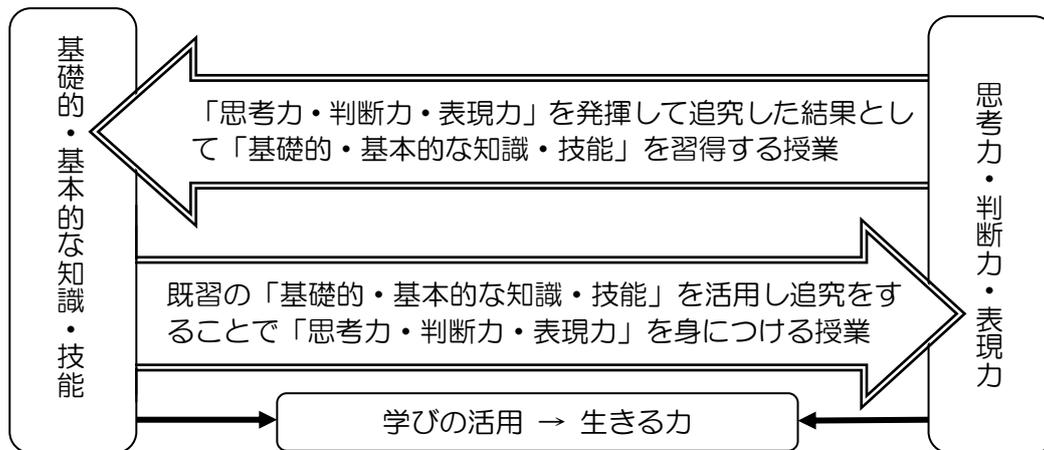
本校の「学力向上」の課題は、①学習に対する関心（集中力・持続力） ②基礎的・基本的な知識・技能の習得と習熟 ③思考力・判断力・表現力の練成 の3点に集約できる。

そこで、①については朝学習で視写を行うことなどを全校での共通実践として、②と③については「授業づくり」の取組を通して追究することとした。

「基礎的・基本的な知識・技能の習得と習熟」で求められることは、学んだ知識・技能を確実に自分のものとすることである。「思考力・判断力・表現力の練成」のためには、確かな「基礎・基本」を基盤としつつ、児童が自らの力で課題を追究する過程を設定することが有効であると考えた。

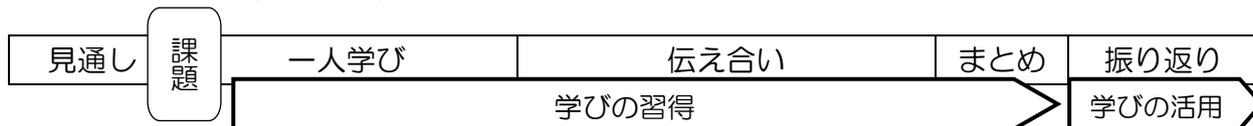
② 主題追究のための授業展開の工夫

主題追究のため、本校では、次の2つの授業展開構成を考えた。1つは、児童が「思考力・判断力・表現力」を発揮して学んだ結果として「基礎的・基本的な知識・技能」を習得する授業、もう1つは、児童が既習の「基礎的・基本的な知識・技能」を活用することで「思考力・判断力・表現力」を養うことのできる授業である。ねらいに応じて、これらを効果的にする指導過程を工夫することにより、有効な授業の姿を明らかにしたいと考えた。

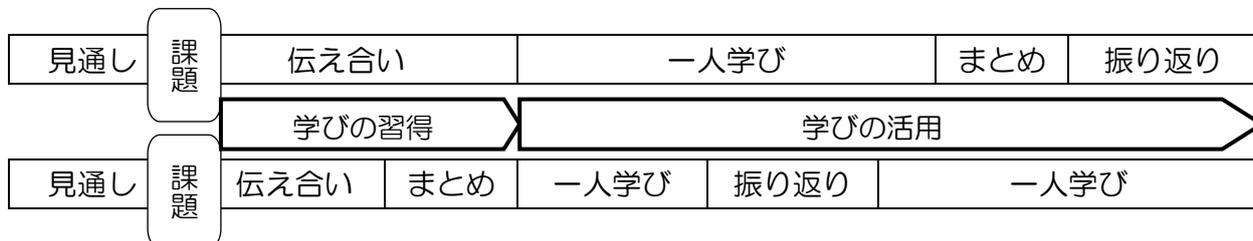


③ 指導過程の工夫

昨年度まで、本校授業の典型的な学習過程は、下記の展開であり、「追究」→「習得」に重点をおく際には有効である。



本年度は、上記に加えて知識・技能を習得した後、それを「活用」→「習熟」することに重点をおく学習課程の在り方を研究することにした。



2 公開授業を通じた研究実践

① 研究主題との関連

本実践は、「読むこと」の指導事項に重点をおいて展開する。単元の前半に評伝を教材として得た知識をもとに、自らの「読みの力」を活用しながら、文学的文章を読み深めさせたいと考えた。本時は、作品教材「やまなし」の導入にあたる。前文と後文の2文のみを取り上げ、これまでに学んだ作者・宮沢賢治の生き方や考え方と関連付けながら、新たに読みの視点を見出そうとするものである。また、2文を比較させ、類似点・相違点をもとに、どのような構成であるか、どのような内容であるかの見当をつけさせることもねらいの一つである。2文という限定があることで読解の苦手な児童にとっても焦点をしぼって思考することができるという利点も想定している。

② 学習指導案

第6学年2組 国語科学習指導案

指導者 岩政 浩二

佐古さゆり

場 所 体育館

- 1 単 元 作品の世界を深く味わおう ～ やまなし・〈資料〉イーハトーブの夢 ～
(光村図書 国語六 創造)

2 指導の立場

○物語と評伝を関連付けて読むことができる教材である。

本単元は、宮沢賢治の代表作「やまなし」と賢治の評伝「〈資料〉イーハトーブの夢」から成る。「やまなし」は、生命が躍動する「五月」と沈黙する「十二月」が「二枚の青い幻灯」として展開されている。そして、二匹のかにの兄弟を視点人物として、比喩表現、色彩表現、擬態・擬声語などにより、川の中の情景が豊かに表現されている。「五月」と「十二月」が対比的に描写されている一方で、その2つの世界には一貫して変わらないこと（類比）も存在する。そこで表現されている抽象的な描写は、作者・賢治の思想の象徴であると考えたい。様々な事象、生命、自然は変化すれども、時の流れは一貫して変わり得ないという理念、自身はかく在りたいとする賢治の理想を作品から読み取るに際し、「〈資料〉イーハトーブの夢」で語られる賢治の生涯や思想は重要な鍵になると考えられる。作者の生き方を知ったうえで、叙述の描写に象徴的に反映されている作者の考え方を読み取る、あるいは作者の考え方をもとに象徴を読み取るという双方向からの学びが期待できる教材である。

○表現の効果をとらえ、自分の考えをもつことを困難とする児童が多い。

本校では、チャレンジ目標の一つに「読書」を掲げ、毎木曜の朝読書の取組をはじめとして、児童の読書に対する関心は高い。本年度の全国学力・学習状況調査においても「読書が好き」と肯定的に回答した児童は8割弱である。読書傾向としては、物語・小説等、文学に属するものが多く、文学的文章の学習でも、叙述から物語の内容を理解することは難くない。しかし、表現のよさや効果などを鑑みながら読んだり、さらにそれに対する自分の考えをまとめ、表現したりすることに、抵抗を感じる児童が少なくないことも、同調査結果から明らかになった。そこで、7月に松尾芭蕉の俳句を題材として、情景描写から詠み手の思いをとらえさせる学習を行ったところ、1単位時間では臆気だった読み方を、次時以降は活用でき、複数の俳句の中から「暑さの中の涼」を感じ取ることができていた。描写や叙述の読み方を丁寧に指導することで、そこから自分の考えを広げ、深める力を身に付けつつある児童たちである。一読では難解な本教材を学習することで、より確かな力へとつなげていきたい。

○作者の生き方・考え方を参考に作品を深く読み取らせたい。

指導にあたっては、「作者の考え方をもとに、自分の視点で作品を読むこと」を、単元を貫く言語活動として位置付け、終末にポスターセッションを行わせることとする。そこで、まず単元の後半に位置づけられてい

る「<資料>イーハトーブの夢」を取り上げ、作者・宮沢賢治の生き方や考え方を「知ること」から始めさせたい。そのために、賢治の略歴を表した「宮沢賢治年表」、賢治の生き方・考え方をまとめた「宮沢賢治事典」を作成する学習活動を取り入れる。その際、資料から読み取れたことを、宮沢賢治を「考える」上でのキーワードとして表出・共通理解させ、「やまなし」の読みに反映させたい。本時の授業では、この「キーワード」と作品のつながりを明確にさせることをねらいとする。「やまなし」という作品は、直接的な描写の巧みさよりもとより、色彩や会話、情景などで暗示的に意味をなす表現も多い。想像を広げながら、あるいは叙述を比べながら読み、作者の考え、それに対する自分の考えをまとめる学習を進める単元の後半につなげたいと考える。

3 単元目標

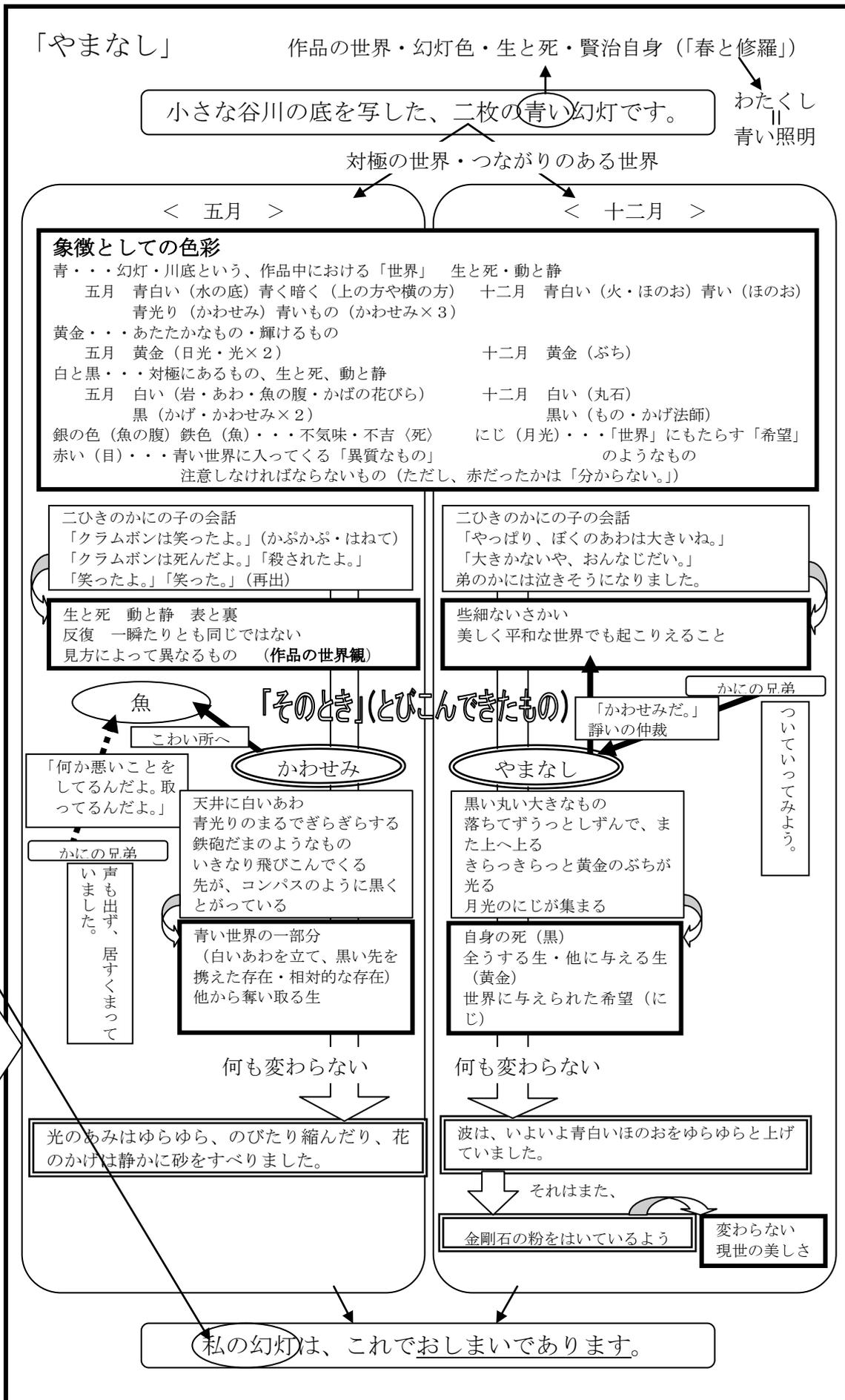
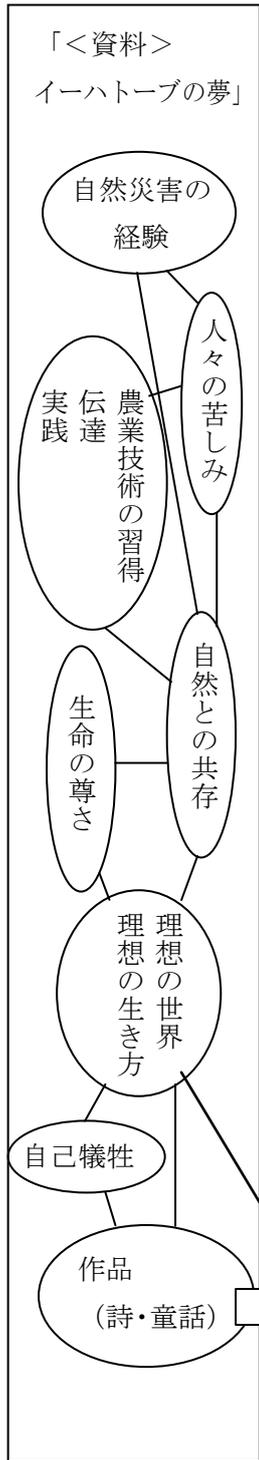
- ① 作者の生き方・考え方を知り、暗示的に表現されている描写の意図を読み取ろうとすることができる。
- ② 作者の生き方や考え方を描写や叙述と関連付けて読み、作品に表されている作者の意図を自分の意見をふまえて紹介することができる。
- ③ 比喩や反復、対比などの表現の工夫に気付くことができる。

4 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
○作者・宮沢賢治について関心をもって調べ、まとめようとしている。 ○描写や叙述の特徴を自分なりにとらえ、読み取ったことを伝えようとしている。	○作者・宮沢賢治の生き方を、資料や評伝を活用しながらとらえることができる。(イ) ◎登場人物の会話や情景をとらえ、暗示的な意味を自分なりに考えながら読むことができる。(エ) ・作者の生き方のキーワードをもとに読み取ったこと、考えたことを発表し合い、自分の考えを深めることができる。(オ)	○比喩や反復、対比などの表現の工夫に気付いている。(イ)(ク)

5 指導計画 (全11時間)

指導過程	次	時	中心学習活動
伝記を読む・ 作者を知る (知識の習得)	一	1	「<資料>イーハトーブの夢」を通読し、本単元の学びのめあてをもつ。
		2	「<資料>イーハトーブの夢」本文をもとに「宮沢賢治年表」をつくる。
		3・4・5	資料本文やその他の参考資料をもとに「宮沢賢治事典」をつくる。
作品を読む・ 作者の思いを読む (読みの習得・ 知識の活用)	二	6 (本時)	「やまなし」の前文と後文をもとに作品の構造と作者の意図を話し合う。
		7	「やまなし」の描写、叙述の直接的・暗示的な読み方について話し合う。
		8・9	宮沢賢治の生き方・考え方を参考にしながら、「やまなし」の描写、叙述の意味をグループごとに考えながら読む。
読みを広げる、深める・ 作品をとらえる (活用から習得へ)	三	10	読み取ったこと、考えたことをポスターセッション形式で発表する。
		11	「やまなし」の主題について話し合う。



7 本時案

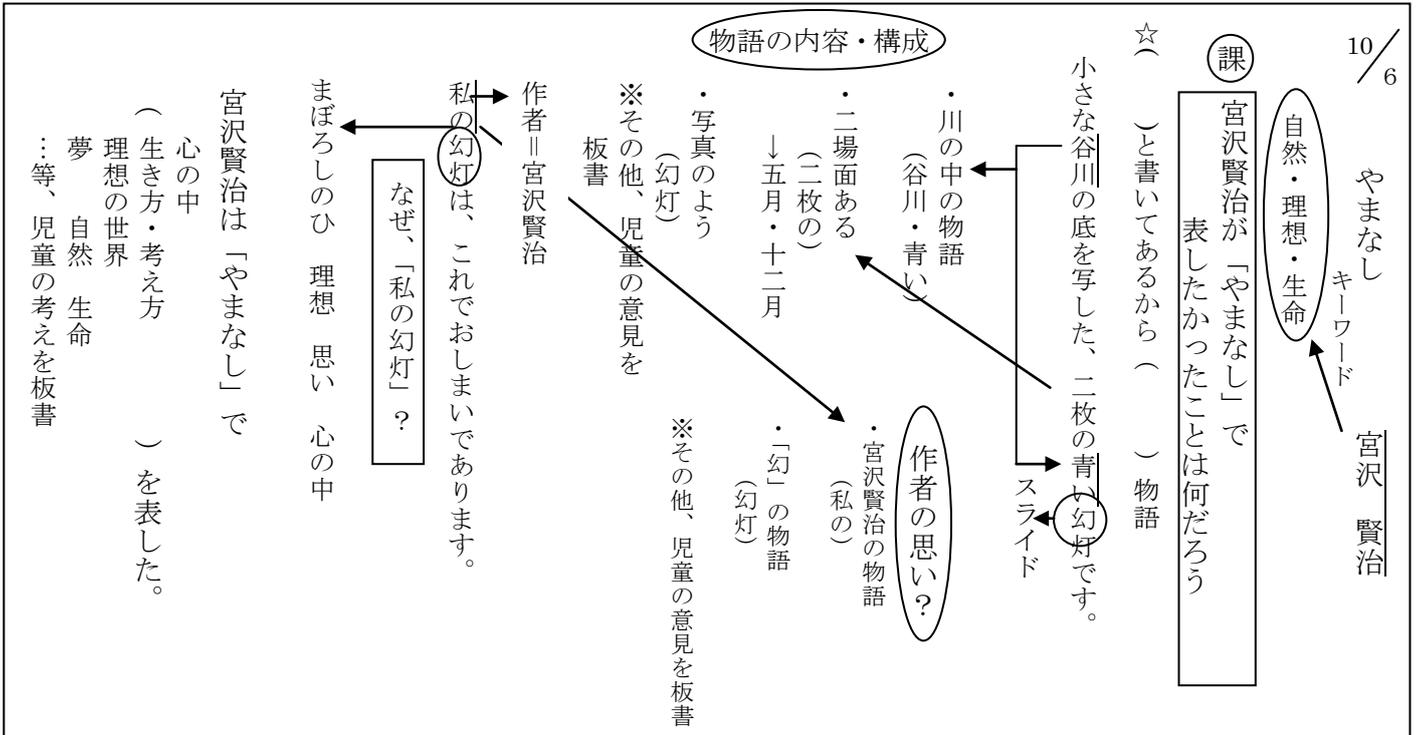
- (1) 主 眼 「やまなし」の前文と後文の叙述をもとに場面や構成を話し合うことを通して、作者・宮沢賢治が作品に込めた思いを読み取ろうとすることができる。
- (2) 準 備 (前時まで)に作成した) 宮沢賢治年表・宮沢賢治事典
- (3) 学習の展開

難 易	学習活動・内容	予想される児童の反応	教師の手だて
学習課題の提示 (見通し)	1 本時の学習課題を把握する。 ・資料から読み取ったキーワード ・初発の感想 ・課題の把握とゴールイメージの共有	○資料「イーハトーブの夢」をもとに作成した年表や事典から、宮沢賢治の生き方をある程度理解していると思われる。しかし、作品の感想は、次のように「難解」とする意見が中心であろう。 ・作品の意味が分からない。 ・「クラムボン」とは何だろう。	・前時まで)に学習した宮沢賢治の「キーワード」を確認・板書し、3・4活動の参考にしたり、終末のまとめにつなげたりする。 ・作品を通読した感想を端的に問い、作者と作品の関係について学ぶことを伝える。 ・課題とつながるまとめの文型を提示し、本時の「ゴールイメージ」をもたせる。
宮沢賢治が「やまなし」で表したかったことは何だろう			
学習活動の活性化 (習得した知識・技能の活用)	2 前文と後文をもとに、「やまなし」で表していることを考え、発表する。 ・語句の意味理解 ・叙述からの想像→場面・構成の把握	○次のような意見が表出されるであろう。 ・「谷川・青い」と書いてあるから川の中の物語 ・「二枚の」と書いてあるから二場面ある物語 ・「私の」とあるから宮沢賢治の物語 ・「幻灯」とあるから幻の物語	・作品を読み取る手段として、前文と後文の二文をとりあげる。 ・「()」と書いてあるから()物語」という文型を提示し、個別にノート記述させ、段階的・意図的に発表させる。 ・二文が比較でき、また、意見が分類されるよう構造的に板書する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 「やまなし」はどんな物語か、二文から考えましょう。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 評 二文をもとに、物語の場面や構成を読み取ることができたか。 </div>
なぜ「私の幻灯」なのだろう			
	3 後文の意味を考え、意見交換をする。 ・叙述の比較→「二枚の青い幻灯」「私の幻灯」 ・私＝作者＝宮沢賢治 ・幻灯＝○○の象徴 ・「おしまいであります」の意図	○次のような意見が表出されるであろう。 ・作者が語っていた物語だから「私の」になっている。 ・「幻灯」はスライドという意味だけではないと思う。 ・「幻灯」なので夢という意味ではないか。	・前文と後文では表現の仕方が異なることを示し、根拠を問うことで、作者の思いが表してある物語であることに気付かせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 後文では、なぜ「私の幻灯」と表しているのでしょうか。 </div> ・考えが出ないときは、「私の()の幻灯」と提示し、()に入る言葉を考えさせる。
振り返りの充実 (まとめ)	4 話合いをもとに、まとめる。 ・作者が作品に表していることを考えること 『宮沢賢治は「やまなし」で()を表した。』	○次のような意見が表出されるであろう。 ・宮沢賢治は「やまなし」で(心の中・生き方・考え方・理想の世界・夢・自然・生命・川の中…)を表した。	・3活動の話合いや宮沢賢治のキーワードをもとに、導入で提示した文型に言葉をあてはめさせる。 ・ノート記述を見取り、全体に発表させる。 ・児童の意見をまとめ、次時から個別に作品を読み取ることを伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 評 作品に作者の考え方が反映されていることに気付くことができたか。 </div>

(4) 評価

- 前文と後文をもとに、物語の場面や構成を読み取ることができたか。(ノート・発言)
- 作品に作者の考え方が反映されていることに気付くことができたか。(ノート・発言)

(5) 板書計画



③ 授業の実際

(1) 本時までの学び < 第一次 ~伝記を読む・作者を知る (知識の習得) ~ >

① 「<資料>イーハトーブの夢」を通読し、本単元の学びのめあてをもつ。

○宮沢賢治の評伝を通して、賢治の生き方や考え方をつかむこと、それをもとに、賢治の代表作「やまなし」の読み取りを児童自身によって進め、ポスターセッションを行うことを示し、単元の学習の見通しをもたせた。

② 「<資料>イーハトーブの夢」本文をもとに「宮沢賢治年表」をつくる。

○評伝に記されている出来事や行動、その際の賢治の考えや発表された作品を年表形式でまとめた。

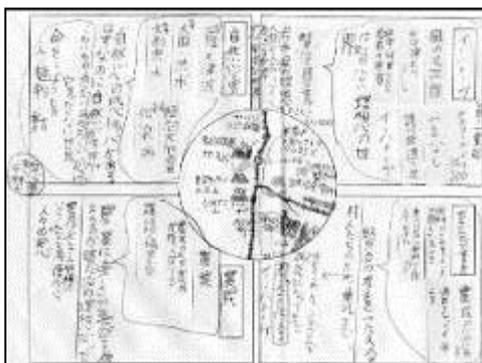


③資料本文やその他の参考資料をもとに「宮沢賢治事典」をつくる。

○評伝から、賢治を象徴するキーワードを書き出し、グループのワークショップにより「賢治像」を導き出した。

○評伝に記されている作品の概要をまとめた。

○「イーハトーブ地図」を描いた。

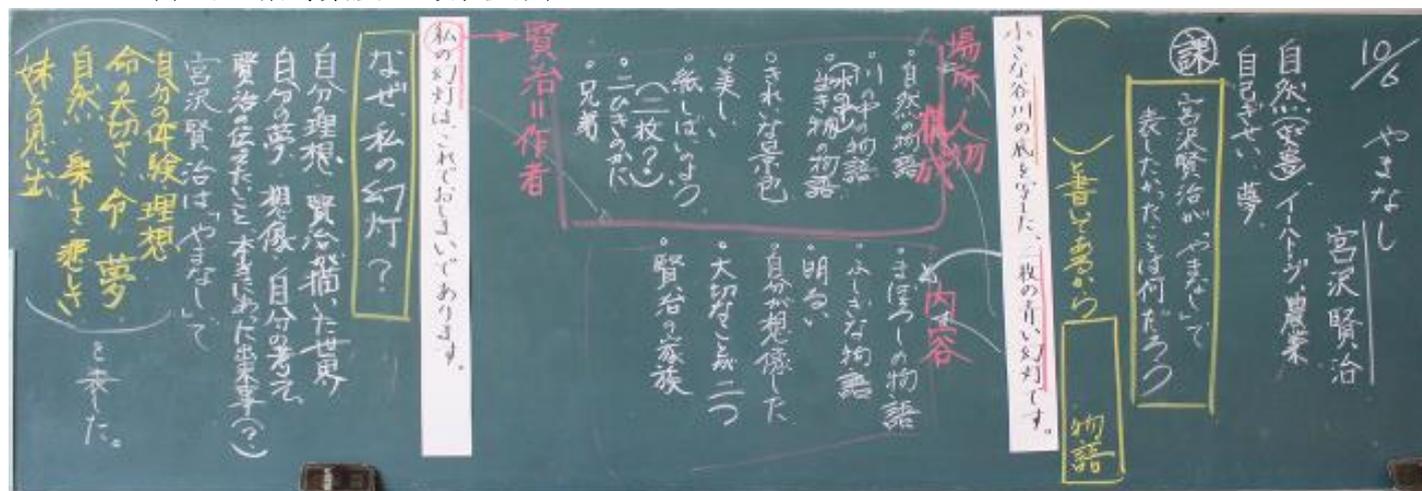


(2) 本時及び本時以降の学び

- < 第二次 ~ 作品を読む・作者の思いを読む（読み習得・知識の活用） ~ >
- < 第三次 ~ 読みを広げる、深める・作品をとらえる（活用から習得へ） ~ >

①「やまなし」の前文と後文をもとに作品の構造と作者の意図を話し合う。

(本時・指導案及び考察参照)

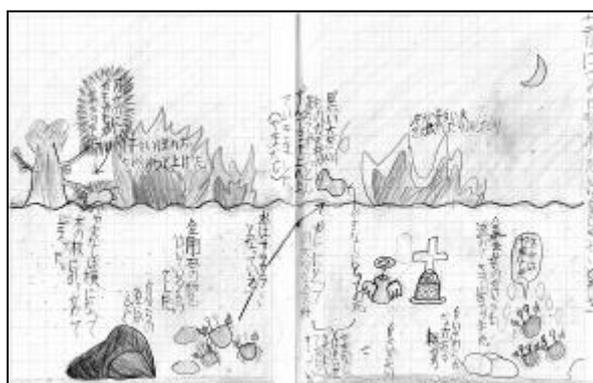


②「やまなし」の描写、叙述の直接的・暗示的な読み方について話し合う。

- 「五月」の場面の叙述を取り出し、それぞれが象徴しているものや作者が反映したかった思いを学級全体で話し合い、まとめた。

③宮沢賢治の生き方・考え方を参考にしながら、「やまなし」の描写、叙述の意味をグループごとに考えながら読む。

- 前時までに学んだ「読み方」を用いて、「十二月」の場面の叙述から、それが象徴しているもの、作者が反映したかった思いを、グループを主体として、個々で読み進めた。



④読み取ったこと、考えたことをポスターセッション形式で発表する。

- グループごとに読み取ったことをポスターセッション形式で互いに紹介し合った。

⑤「やまなし」の主題について話し合う。

- 題名が「やまなし」である理由を話し合い、作者が作品に込めた思いを考え、感想としてまとめた。



3 考察

① 授業づくり研修会の研究協議における主な意見と指導

- 年表や事典を作ることで、作者の生き方、考え方を知識として理解した上で、教材文を扱うという単元構成の工夫がよい。事前に得た知識が本時の児童の考え、発言に生かされていた。
- 課題と同時にゴールイメージ（授業の終末にどのようなことが学べていればよいか）を示していたことで見通しをもった学習ができていた。
- 前文と後文の2つを必要な情報として提示したため、考えやすかった。
- 文型を提示することで考えを焦点化でき、児童が記述しやすいと感じた。

- 一人学びの際に個別指導をすることにより、どの児童も自信をもって発言することができていた。同時に児童の考えを見取り、適切な順に発言させていたことで考えが段階的に深まっていた。
- 根拠を問う、あるいは思考過程を問う「なぜ」という補助発問は有効である。
- 次時以降の学習の見通しをもたせる授業のまとめ方ができていた。
- 児童同士の意見の交流があればよい。
- 「幻灯」というキーワードは共有できていたのか。
- 指 構造的な板書により「伝え合い」が成立していた。
- 指 評価の観点を明確にして、授業に望むことが重要である。

② 本時でみとれた成果

- 習得した知識を活用すること

前文と後文の2文だけを取り上げたことで、児童の想像力も限られてくる。少ない情報の中から考えを見出すために、これまでの学習で知識として得ている作者・宮沢賢治の生き方や考え方を関連付けて考える必然性をもたせることがねらいである。特に後文で「私の幻灯」と表されている根拠を問い、「やまなし」という作品には、作者・賢治の理想や夢、体験などが表されているのではないかという思考にたどり着くことができた振り返る。
- 2つの文を比べて読むこと

前文と後文の共通点や相違点に着眼し、表現の仕方から想像したことを「()と書いてあるから()物語」という文型にあて考えさせるようにした。前文の「谷川」「青い」などのことばから場面を想起させ、「幻灯」「私」などのことばから、宮沢賢治の生き方や考え方を関連付け、賢治の思いを映し出した内容であるという意識をもたせることにつながったのではないかと考える。
- 本時の「ゴールイメージ」をもたせること

課題「宮沢賢治が『やまなし』で表したかったことは何だろう」に対するまとめの文型「宮沢賢治は『やまなし』で()を表した」を、導入時に提示した。このことにより、本時の学びがどこに向かうのか、本時で考えていくことは何なのかという見通しを明確にもたせることができるのではないかと考えた。この作品が、作者は表したかった「何か」を反映したものであるという視点ももたせることにつながったと思う。

③ 単元を通しての考察

前述しているように、本校の研究視点の一つとして「指導過程の工夫」がある。本単元では一単位時間だけではなく、単元全体の指導過程を検討することで、知識の活用を図った。これは作者の思想と作品との関連が深い本教材ならではの展開であるといえる。本単元の学びを通して、児童は文学的文章の「主題」に着目することを、新たな読み方として学んだと考える。それは、単元終了後、6年生のこれまでに学習したたくさんの物語文の主題を自分たちなりに話し合っていた姿からもうかがえる。また、叙述を表面的に読むだけではなく、暗示的に表現されていることも意識し、想像を豊かに働かせて、自分の考えをまとめる力にもつながったととらえている。単元全体で、知識の習得と活用を繰り返すことで、新たな知識を習得し、児童自身の力として生かされるものになることと考える。

なお、本実践は、第6学年3学級の担任と学力向上推進教員との協同実践であるとともに、本校研究の具現化のため取り組んだものである。国語科授業のみならず、他教科にも応用できる指導過程の一事例として提案できるとともに、それぞれの授業力向上、教材研究の高まりにつながったと思う。